

# 学 位 論 文 要 旨

氏 名 上田 裕子

題目 医療系大学生等への薬物乱用防止教育プログラム開発に対する実践学的研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

## 1. 【目的】

本研究は、3年課程看護師養成学校の学生を対象に、2年間において薬物乱用防止教育を実施し、その効果を検証すること及び医療系大学生等に対する薬物乱用防止教育プログラムを開発する示唆を得て、教育実践の一試案を検討し今後の展望を考察するものである。

## 2. 【方法】

新入生81名を対象に、ライフスキル教育を踏まえた薬物乱用防止教育を実施し、教育前後と3か月後の調査から教育効果を検証した。また、『薬物乱用防止教育を受けて考えたこと』をテーマに、記述レポート内容をテキストマイニングで計量的質的分析の視点からも教育効果を検証した。教育直後の4月調査は、対応のあるデータとして分析した。7月調査は、学生の匿名性を確保するために、新たに調査票を配布し対応のないデータとして分析し教育効果の継続性を検証した。

翌年度の入学生に対しては、前年度の課題を踏まえ、薬物乱用防止教育プログラムの内容を改訂し、学生自身が断り方を思考しトレーニングできる実践的教育を展開した。

調査は、無記名自記式質問紙調査を実施した。質問項目は、①基本属性や学生生活満足度など学生生活に関する項目、②乱用の危険性のある8薬物の理解度、薬物乱用に対する規範意識、薬物を誘われたら断る自信と行動化への自信の程度などで構成した。

最初に教員がロールモデルとなり断り方を3パターン提示した。その中から、学生自身が最も行動に移しやすい断り方を選択した。さらに個々でも断り方を考案し、学生間でトレーニングする時間を設け、発表し相互で複数の断り方を知り学びあう意見交換を実施した。

## 3. 【結果】

薬物乱用防止教育直後は、乱用の危険性のある8薬物の理解度は上昇したが、3か月後には低下していた。教育直後の影響から理解度は上昇しやすいが、3か月もすると忘れていく傾向にある自然な経過を示した。しかし、3か月後の理解度の得点は、教育を実施する以前の得点より低い状態にならず、一定の教育効果の継続性を確認することができた。

薬物乱用に対する考え方では、「個人の自由」と肯定する姿勢をもつ学生が数名認められた。また、薬物の誘いに対して断らなければと理解していても、断る行動に移せる自信の程度が低い学生も存在し、断りきれない可能性を示した。

レポートの内容分析からは、講義で触れていなかった薬物依存者の治療や看護、社会復帰施設での回復支援に関する記述も認められた。

次年度の入学生も、薬物の勧めを断る自信があっても、行動に移す自信が低くなっていた。さらに、薬物を勧められた経験をすでもつ学生がいたことは、今回の調査で初めてであった。学生の身近な日常生活環境のなかで、確実に薬物が身近に潜んでいることが明白となった。そのような社会背景で看護師を目指す学生であっても、薬物に対する考え方が、「個人の自由」と肯定する学生数が増加しており、学生の薬物に対する規範意識も低くなっている傾向を示した。

教員が提示した3パターンの断り方のなかで、『きっぱり断る』を選択した学生は約70%であった。約30%の学生は、『相手を気遣いながら断る』、『理由をつけて断る』を選択していた。学生が自分自身で断るセリフを考案し、ペアで断り方のトレーニングを行ったことで、「頭の中で考え文字化していても、言葉で表現するのは難しい」などの意見が認められた。クラスメイトという顔見知りの相手だからこそ、言いにくいことを経験していた。そして、学生が自身で考えた断り方を相互で発表することで様々な断り方があることを知る機会となっていた。

#### 4. 【考察】

看護師を目指す学生であっても、他学生と同様に日常生活環境のなかで確実に薬物が身近に潜んでおり、薬物を誘われる機会に遭遇する危険性がある。特に将来は、医療従事者として医療系麻薬などを取り扱う業務に従事する医療職だからこそ、乱用の危険性のある薬物に対し理解を深めることは、社会的にも医療や患者・家族へ貢献できると考える。

レポートの内容分析から講義で含まなかった薬物乱用者の治療や回復支援など、自主的に調べ記述していた。このことから、看護学生を含む医療系大学生等に対する薬物乱用防止教育は、薬物の危険性や断り方などの一次予防対策というまでもなく、薬物乱用者の治療や看護、再乱用防止対策や社会福祉施設入所、回復支援など、さらに専門的な二次・三次予防対策を教育内容に盛り込む方向性が示唆されたと考えられる。

2年めの研究では、ライフスキルを駆使し、誘われても断る行為を習得するトレーニング型教育プログラムに改善し実践的な教育を実施した。自分自身で考案した断り方でも、行為に移せる自信の程度は低かった。顔見知りなど学生間の交友関係から、断りにくい状況になることは容易に想定できる。「危険な場所には、最初から近寄らない」ことや、「誰かに相談する、逃げる」など、最終的に薬物を誘われても確実に断る行為に移せる教育を継続的に実践する必要がある。

断り方においては、『きっぱり断る』を選択した学生は約70%であった。それは、2年めの調査結果でも同程度の割合であった。これまでのわが国の薬物乱用防止教育は、『NO!ときっぱり断る』ことを主眼に置いてきた。しかし、この結果から、現在の未成年者及び若年層において、『きっぱり断る』という断り方は適していない可能性が推察された。言葉で表現することが難しい学生に配慮し、学生が自身に適した断り方を選択できる教育内容に改善することが求められる。そのためにも、ライフスキルの根幹にあるセルフエスティームを育むことも重要である。それは、ライフスキルが、コミュニケーションスキルや問題解決スキルなど断る行為に必要なスキルを包含しているからである。いつ、どこで、誰に薬物を誘われても、断り方をその場で瞬時に考えられるようにならなければならない。

本研究は、セルフエスティームを基盤にし、断り方を考えトレーニングする教育プログラムの一試案を実践し成果をまとめたものである。対象を看護学生に限定したことから、薬物乱用者に対する治療や社会復帰支援にも関心を示していた。今後は、医療系大学生等への薬物乱用防止教育において、治療や社会復帰などを包括的な教育プログラムへと改善を重ねていきたいと考えている。